

特集 編集委員今年の抱負 2013

研究の化石

矢入 健久 東京大学



私的な話で恐縮だが、つい最近、化石掘りを体験する機会があった。東京から電車に揺られて1時間ほどのある海岸に着き、太古の地層断面とともに露わになった砂岩をハンマーとたがねでガンガン削ると、小さな二枚貝の化石の断片が現れた。全く希少価値のない生物種の化石だが、その個体自身が実際に生きた期間の100万倍もの時間地中に眠った後に、偶然私によって発見されるという巡り合せにちょっとした感動を覚えた。

それから数時間のうちに数十個のさまざまな形・大きさの貝の化石を掘り出し、満足したのでさあ帰ろうと腰を上げたとき、ふと、化石の貝達が過去の学者達が人生を費やして遺していったものの世間からは忘れ去られてしまった幾多の研究や論文と重なるように思えてきて、少しセンチメンタルになった。しかし、帰りの電車で缶ビールを飲んでいるうちに、たとえティラノサウルスやマンモスの化石でなくても、私に十分な感動を与えてくれた二枚貝のように、日の目を見なかった過去の研究や論文もそれを発見する人にとっては何らかの「化石的」価値を持ち得るのではないかと思直すようになった。

そういうわけで後日、「研究の化石掘り」を実践すべく、約20年前に書いた(はずの)学部時代の卒論を掘り出してみることにした。これは秘密だが、出身学科の図書室の棚に私の卒論は存在しない。なぜなら提出直後に指導教官から多くの問題点の指摘とともに返却され、修正と再提出を命じられたものの、結局直さなかったからである。

大学での居室の片隅に積み重ねられた段ボール箱を一つ一つ開けて探すこと数十分、「研究室バックアップ・卒論」というラベルが貼られたフロッピーディスクを発見した。この時点でまず軽い感動を覚える。さらに、USB接続のフロッピーディスクドライブも何とか調達することができ、ディスクから卒論の文書ファイルを取り出すことができた。ちなみに、当時使っていたOSはWindows 3.1で、卒論執筆に使ったのはMS-Word 2.0であった。

深呼吸をしてから、ファイルをダブルクリックすると、最新バージョンのWordが起動し、拍子抜けするくらいあっさりとファイルの中身が表示された。しかし、良く見るとやはり数式や図の一部が壊れており、化石っぽさを辛うじて感じる事ができた。

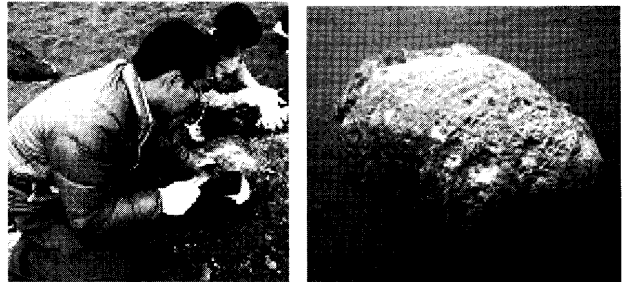


図1 化石を掘る筆者(左)と採集された二枚貝の化石(右)

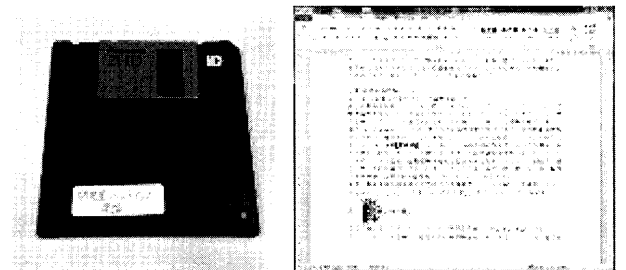


図2 発掘されたフロッピーディスク(左)と卒論(右)

さて、肝心の中身であるが、予想どおり散々な出来であり、現在の指導学生達にはとても見せられないものであった。しかし、20年前の自分が考えたことや書いたことに真剣に向き合うのは、これからさらに20年以上研究生生活を続けるために姿勢を正すうえで、けっしてむだではないはずと自分を慰めた。ちなみに卒論のテーマは、故障した人工衛星の姿勢制御系の再構成に関するものであった。今まであまり意識していなかったが、現在主に取り組んでいる異常検知研究の自分的な起源が実はそこにあったことに気が付いた。

無論、我々プロの研究者に求められるのは、学術的価値や実用的価値をもつ研究や論文であるが、現実にも目を向ければ「恐竜」級の成果として後世に残るのはそのうちのごく少数であることを受け入れなければならない。我々が書いた論文の多くは、数年、数十年のうちに忘れ去られて暗い地層に埋もれていくことになる。しかし、あの日私が海岸で見つけた二枚貝の化石のように、遠い未来に誰かに発掘してもらえるかもしれないと思うと少しだけ楽しくならないだろうか？